

でいっぱいだ。一緒に担任をしているM先生の学級経営や、生徒への話し方、褒め方、叱り方等の一挙手一投足が勉強になっていく。

一学期が始まって最初の学活の時間に、担任としての話をした。M先生が「中学校最後の一年だからすべてにおいて完全燃焼しよう」という趣旨の話をした。一方、私は「夢は大きく持とう。だから、私は日本一のクラスにしたい。それと、クラスとして取り組む行事にはみんなで『バカ』になって燃えようよ！もちろん先生もバカになるから」といったような話をした。経験がなく、「若さとバカさ」しか売りものがない私と言える事は、こんな理想論だった。その後、班分けをして、それぞれの班のモットーを書かせたら、「完全燃焼してバカになる」と書いた班があった。M先生と「バカになって完全燃焼してほしいけれど、これじゃ、本当のバカになってしまいそうだ」と笑いながら話をしたが、初めて私の話を聞いて、わかってくれた生徒がいたことが嬉しかった。

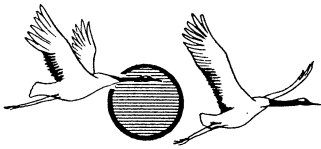
修学旅行も無事終わって、校内陸上大会にあわせて各クラスで学級旗を作ることにした。仙台で学生時代を過ごした私は、この頃はまだ言葉の語尾が「だっちゃ」という仙台弁がしょっちゅう出ていた。そんな

わけて生徒たちは学級旗に、M先生と私の似顔絵、それと「完全燃焼だっちゃ」という文字を描いた。

また、生徒に完全燃焼してほしいという願いから、学級通信の題を「完全燃焼」にして、題字を一人一人の生徒に書いてもらうことにした。

そんなこんなで、生徒とのふれあいの日々が続いている。学級旗をマントにして「だっちゃマン」になるなど、バカな事もたくさんやった。もちろん、うまくいく事ばかりではない。むしろ、失敗と後悔の連続である。経験のなさを悔しく思うこともあった。数年後、経験という武器を手に入れるだろう。でも、いつまでも心に「若さとバカさ」という武器は持っていたい。そして、生徒と一緒に完全燃焼していきたい。

(郡山市立小原田中学校教諭)



正月の風景

鵜沼 美枝子



「あなたにとつて大事なものは」と聞かれたら、ちゅうちよすることなくあげられるもの一つに、これまでのすべての勤務校で作り返ってきた学級文集がある。今では、わが家の書棚の相当のスペースを占領している文集であるが、手にとれば、

たちまち、あの日あの時へタイムスリップするのである。三人の子の母となつたあの子も、たくましい父親としてがんばっているあの子も、

「○○ちゃん」

「○○君」

顔の当時へと戻っていくのだ。文章を書くことが大の苦手だつたわたしが、子どもたちの書く文章のとりこになつてしまつたのは、学生の時であつた。それまでに読んだどんな文章よりも熱いものをわたしにぶつけ、心を揺さぶつた。

「ああ、わたしも、こんな文章を子どもたちに書かせることができたなら」そして、新任の地で四年生の子どもたちと作つた記念の第一号。今、

手にすると、それは五十ページにも満たないガリ版刷りの実に粗末なものだが、第一号への気負いとうれしさだけは、変色した紙面からも十分伝わってくる。

「子どもたちに書かせようと思つたら、自分でも書かなければ。そうでなければ書かせる資格はないよ」という恩師の言葉を胸に刻み、一日一行でも書くことを心がけてはいるが、忙しさを理由に棚上げしてしまうこともたびたび……。

「これでは、子どもに強いことは言えないなあ」

と反省することしきりである。振り返ってみると、かなり無茶をしたと思うこともあり、かえって書くことを嫌いにならせたしまったのではと、冷や汗の流れる思いもする。それだけに、様々な思いがたつぷり詰まつたこれらの文集は、何物にも代えがたいのである。

時の流れとともに、ガリ版は印刷機へと姿を変え、わたしの鉛筆だこ